編集後記

本号には、13名の先生方からそれぞれ本誌に相応しいテーマの原稿が寄せられ、無事刊行されることとなりました。執筆者の先生方には、この場を借りて感謝申し上げます。また、刊行に至るまでご協力くださった事務室の皆様にも感謝の言葉をささげます。

本号への寄稿依頼の過程において、編集委員として森瀬壽三先生が多大な努力を傾けてくださったこともあり、論文３篇、特別講義１篇、教学レポート２篇、視聴覚資料紹介３篇、エッセイ３篇が掲載されることとなりました。このように、視聴覚教育に関する多彩な論述からなる本誌『視聴覚教育』は、全学的なレベルから視聴覚教育を考える広場としての役割を担ってきました。しかしながら、名残惜しいことではありますが、本号をもって廃刊されることとなりました。これまで30年間にわたって本誌が担ってきた役割は、今後、新しい時代に即した形で引き継がれていくことを期待したいと思います。

本号に寄せられた２編の教学レポートでは、いずれも視聴覚教育にかかわる現場感覚から、改善されるべき問題点が明確に述べられています。こうした教育現場に立脚した前向きの指摘が盛り込まれた文が掲載されるのも、本紀要の特徴のひとつでもあったように思われます。また、本誌の最後を飾る「「学び」と教材」というエッセイは、「「学び」とは、きわめて創造的な活動」であって、「資料をコピー＆ペーストすることでは得られない世界なのである」と主張しているが、キーボードを叩くだけで豊富な情報に接しうるIT技術が飛躍的に発展しつつある今日であるだけに、なお今後とも教育のあり方に楽観してはいられない側面を考えさせてくれます。

数多くの先生方の御玉稿が蓄積された本誌は、本学における視聴覚教育の歩みを辿る上で、今後、貴重な資料になると思われます。そうした意味から、巻末「資料」として既刊号目次を一括して掲載することに致しました。必要に応じて御参照いただければ幸いです。

2007年３月

編集委員長　熊谷明泰